

え ど ベ ん だ よ り

Ed.ベンだより



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話/Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

【教育講演会報告】社会問題と個人の問題が交錯する場所・・・女性の生きづらさ

今年度のEd.ベンチャー教育講演会は、『『逃れられない問題』としての女性の生きづらさ』をテーマに、2月23日、5人のパネラーと司会者、そして東京大学の本田由紀先生を交えて行われました。前回の「Ed.ベンだよりNo.54」でお伝えしたとおり、一年間通して追求してきたこのテーマへのアプローチ方法は、個人史を共有することで課題を浮き彫りにするという手法をとってきました。そのため、5人のパネラーからは、それぞれが今まで出会ってきた、人生の中での女性の生きづらさにつながる厳しい出来事を赤裸々に語っていただきました。パネラーの覚悟なしには聞かせていただけない内容ばかりでした。

私たちの国では社会問題としてしっかり扱われなければならない事柄が、個人の問題として片付けられてしまうことが多いように思います。それが日本社会が持つ自然発生的な帰結なのか、それとも強者や為政者の都合によってねじ曲げられた見方なのかはわかりませんが、「女性の生きづらさ」といった社会問題は、多くは個人の問題として認識され、片付けられてきたのではないのでしょうか。教科書には男女平等が明記され、女性参政権が成立したときに、歴史的には日本でも「女性差別」は終わったように受け取られます。しかし、今回の個人史の中には、紛れもなく社会問題としての女性の生きづらさが、はっきりとあぶり出されました。

例えば、パネラーのCさん(女性)は以下のように語ってくれました。

「私は田舎育ちで、曾祖母、祖父母を交えた8人という大家族で育ちました。母と祖父母との折り合いが悪く、本家であることから親戚も首をつつこんで来て、母はそれに耐えきれず、私が小学校の時に、父と私たち兄弟と共に家を出ました。しかし、父は祖父母が心配になったのか数ヶ月で実家に戻ってしまいました。子どもだった私は、不安な気持ちを抱えながら生活していました。母と私たちは2年ほど父不在で過ごしました。離婚するかどうか、母は迷っていたようですが、結局最終的には離婚に踏み切れませんでした。実祖父からは、子どもひとりだけ連れて戻ってきてよと言われてたそうですが、母は3人の子ども達の中からひとりだけを選ぶことが出来なかったと、後に私たちに話してくれました。それからことあるごとに、母は私たちに、女性が経済的に自立することが必要だと、自分が離婚できなかったのは経済的な自立が出来ていなかったからだと言ったように話していました。」

どうでしょうか。Cさんの母親が抱えた問題は、一見して「個人の問題」として処理されてきたはずですが。しかし、母親自身の捉え方は違います。以前の「家父長制を核とした家族制度」や、「女性の経済的自立」という社会的な問題としてとらえ、子ども達に伝えていきます。しかし、ここで出されている女性の自立の問題は、時間を経た現代では解決されたのでしょうか？パート労働に占める女性の割合や、正規労働者の男女による賃金格差などを見れば、その答えはいまだNOであると言わざるを得ません。

「社会問題」として捉えるべき課題を「個人の問題」として処理する圧力は、他の場面でも多く見られます。例えば障がいに関わる問題もそうです。昨年末文部科学省は、学級に在籍する児童生徒のうち8.8パーセントの子ども達が発達障害などで学習や行動に著しい困難を抱えている、と発表しました。確かに、発達障害を理由として特別支援教育を求める声は現在強く、特別支援学級はどここの学校でも満杯です。しかし、発達障害を抱えて生活しなければならないことは確かに「個人」のことですが、かといって学級で学習や行動に著しい困難を感じることは、「個人の問題」とはいえないのではないのでしょうか。なぜなら、教室や学習の環境を、課題を抱える子ども達にあわせて作り直すならば、著しい困難を感じないでみんなと一緒に学習したり出来るからです。それこそ、発達障害を抱えるお子さんへの、社会的なアプローチの不十分さが「著しい困難」を生み出していると考えざるを得ないのではないのでしょうか。しかし、文科省の発表の仕方は、ついてこれない原因は発達の障害にあると言っているのです。「普通級についてこれないので取り出して・・・」という発想は、国連からも是正の勧告を受けるに至ってしまっています。

どうでしょうか。私たちは個人に降りかかってくる様々な社会的な問題を、「個人の問題」としてではなく「社会の問題」として見抜く視点を獲得できているのでしょうか。教育講演会でパネラーの皆さんが発表された体験のいくつかを、以下に並べてみます。皆さんはどのように捉えられますか？

<Aさんの体験> 小学校時代に感じた不自由

祖父母に対する違和感を感じたのは、小学校時代でした。そのきっかけは、兄と私に対する態度の違いでした。小学校中学年くらいから、祖父母の夕食づくりの手伝いをするようになったのですが、特に「手伝ってー」のような声かけもなく、いつ始めるのかもわからないのが常でした。ですから、祖母がキッチンに立った音や包丁を取り出し

た音などから察して手伝いに行く必要がありました。もし手伝いに行き損ねると祖母は不機嫌になり、「何もしないで夕飯を食べられるなんて恵まれてるわね。どうせ、わたしが全部やればいいのよ。」という嫌味を食事中ずっと言い続けます。しかし、兄は手伝いに遅れようとあまり嫌味を言われません。兄がたまに早く手伝えば称賛され、いつも手伝っている私は「いつもだめね」と嫌味を言われていました。母にそのことを訴えても、「あなたが夕飯の手伝いをするとき、笑顔じゃないからいけない」と、私に非がある前提で諭されるのでした。兄と違って、女性である私は小さい頃から家族労働に縛りつけられていました。もちろん、祖父母や母親からの、兄と私への扱いの違いは、その他の様々なところでもありました。

<Cさんの体験> 破綻した結婚生活

結婚当初、家事や家計については夫と話し合い、分担することにしました。子どもが生まれるまでの5年間は、私は仕事に打ち込み、毎日22時ごろに帰宅したり、休みの日も仕事に行くなどの仕事人間でした。

一人娘を授かってからは今までのようにはいかず、夫ともう一度話し合いを重ね、分担の見直しをしました。私は仕事が面白くなっていた時期でしたので、仕事優先だったかもしれません。夫は少しずつ不満をためていたようで、保育園の懇談会など、「男親は俺一人だった」と不満を言うようになりました。しかし、不満を受け止めきれない私は、私の方がもっと大変なのに…と内心思っていました。

ある時、夫婦間でささいな行き違いがあり、お互い口をきかずに何週間かを過ごした矢先、私の一言がきっかけで夫がキレてしまい、娘の目の前で私は暴力を受けました。警察を近所の人が呼んでくれて、私は全治2週間と診断されました。娘は怖かった気持ちを、学校で友達に吐いていたようでした。夫は家を出ていきました。

<Bさんの体験> 社会的資源の少ない家庭のケース

私は両親と姉と祖母と公営の団地で育ちました。経済的には豊かでなく、両親は社会的資源が少ないと思います。家族の関係を良好に保つため、間に私が必死に入っていたように思います。小学校5年の時に両親の不仲が原因で、母が急に家を出て行ってしまったことがありました。離婚するかもしれないと、内心覚悟したことを覚えています。母はパートという形でしか仕事をしていなかったため、子ども達を養う経済力がなかったからか戻ってきて、ギクシャクしながらも家族は再開されました。

安定した職業である「先生になりたい」と考えるようになり、大学までストレートで進める私立高校への進学が決めました。その頃、父親が仕事を辞めることになり、経済的にはさらに厳しくなりました。両親は「何とかする」と本当に身を削って働いて、借金などもしながら通わせてくれました。祖母はそのころ寝たきりで、母はパートを掛け持ちしながら祖母の介護もしていました。父も新しい仕事を始めましたが、うまくいかず、アルバイトなどをしながら何とか毎日を暮らしている状況でした。

そんな両親を見ていて、「先生になりたい」という夢を追っている自分が二人を苦しめているように思い始めていました。誰にも相談できず、夜中に一人で泣く日が続き、「私なんか生まれてこなければよかった」と手首や腕を何度もカッターナイフで切ることを覚えました。その時の感覚は本当に不思議で、血を流していると心がふっと軽くなり、楽になりました。

本田由紀先生からのコメント 発表者に寄り添いつつ社会学的視点で内容を整理してくださいました。

●ありきたりな言葉でなく、自分の言葉で経験を語ることは、本人にとっても、聞く者にとっても、あるいは社会全体にとっても、社会の絡まりを何とかほぐし、もう少し前に進めていくうえでものすごく大事な機会になると思います。

●パネラーの皆さんの話の中には、「女性」という問題と同時に、ひとくくりの「家族」という問題が現れていたと思います。この二つがつながる形で、個人の中に流れ込んでいるような状態であると思います。

●稼ぐことは主に男性がするかもしれませんが、「家事」「子育て」「疾病ケア」「家計」を女性（特に母親）に押し付け、それに付随するもろもろ面倒くさいこと（汚れ仕事）を全部女性がやるということは、政策的につくられてきたことです。

●私たちはいつまでこうしたことを個人や家族の問題として引き受け、受け入れ、おとなしく、苦しみながらこの社会を支えていく礎とならなければいけないのでしょうか。

Ed.ペンだよりの紙幅では報告しきれない本当に充実した教育講演会となりました。

【理事の一言】 今年度、久しぶりに中三の担任となった。若いころは「学年全体のことを考えて」とか「学校の中心として…」とか、訳も分らず気負ってばかりいて、子どもたちに過大な要求をしたり、時には力で押さえつけたりして、今になって思えば、教師のコントロールが効いているのが良い学年、学級だと勘違いしていた。さて、60歳を過ぎてからの担任である。子どもたちから見れば、おじいちゃんである。今年の方針は、運動会や合唱祭などのクラスマッチで勝負にこだわらずに、「楽しんだもん勝ち」に徹すること。もう一つは、説諭や指導は二の次で、子どもの話をたくさん聞くこと。この二つだけで「学校が楽しい」と「友達と何かをすることは楽しい」のアンケート回答は急上昇。子どもたちにとって自慢のクラスになっていったのである。他の教師たちから見れば、「甘やかして…」とか「学校の仕事もつとしてよね」とか、陰口も聞こえてきそうで…その方たちからの評価はとても低いと思うが、若手の先生たちの参考になるかなと思って書きました。(MM)